

広島俳句倶楽部

令和二年九月作品集

山位い

あざみ

私は、瀬戸内海を見下ろす里山に住んでいます。朝焼で赤紫に染まる鳥々、ドラの音に出入りする船、不夜城のごときコンビニート。時には、猪、狸、穴熊に出遭い、驚くこともあります。大雨になると、災害が起きないかと心配もします。でも、今年のようにはコロナ禍で外出自粛の日々となつても、四季の移り変わりを楽しめるよさもあります。不自由な山位ですが、何を見ても俳句の心が動き、ここに住んでいることを幸せに思っています。

鳥の声聞きつつ棘薙漬けてをり

梅雨の月鉞の句が手に残り

子の手から流す笹舟南吹く

縁台にひとり飲みるる一夜酒

青葉木菟明日炊く米を研いでをり

名月を眺めて山に住みにけり

産神の裾畑めぐる猪の垣

寄せ鍋にかばす二三個擁いで来る

手作りの木椅子で猫と日向ぼこ

夕さりの裏の畑に大根抜く

風鈴が寺のどこかに鳴りにけり

大雨の上がりし山に蜻蛉とぶ

新涼が桑の木に來てゐたりけり

秋の日はいま大杉の中にあり

すいっちよにはやばやと雨降り出しぬ

鳴き出してしかと聞こゆる虫の声

盆の月真正面に見てゐたり

がちやがちやは月の出遅き夜に鳴く

枹の実にすぐ止む雨となりけり

啄木鳥や峠の風の吹きやまず

佐保光俊

強風の中を飛びをる秋の蝶

島々の近く見ゆる日鯉を釣る

渋滞の車列に釣瓶落しかな

ラジオ消し車降りればちちる鳴く

万屋の掃かれし三和土燕去ぬ

門を入る人に触れたり実紫

背戸山の露けき道を上りたる

屋根越しに朝日の差せる曼珠沙華

夕風の吹き渡りたる稲穂かな

花野道養鶏場に続きたる

村上正人

萩の花すこし散らして通りけり

盆の月待ちをれば風強く吹き

風止んでまた虫の音のしてをりぬ

虫の音のほかは聞こえぬ今宵かな

冷やかに朝風の吹く橋の上

午後二時の日差の中の芙蓉かな

忌のこ草名を知つてなほ好きになり

まだ青き榎植の實へと手を伸ばす

銀杏の五つ六つ八つ落ち始む

この道にまだ咲いてゐる水引草

高尾ひとみ

杖ついて上る坂道蟪蛄の鳴く

社まで道真つ直ぐや稲の花

裏畑に声のしてゐる野分あと

栗の木の裂け目の匂ふ野分晴

差し潮の小魚に寄る鴨の群

蓮の実の飛びたる空の青さかな

京草履包む薄和紙白桔梗

あるもので済ませる暮し露の玉

月の夜の潮待港の常夜灯

どすうんと藪より猪の飛び出せり

夏ともし白きテントの立ち並ぶ

椽の条に風の通れる広島忌

新涼やシフォンケーキに刃の洗み

初秋の棒のやうなる柳かな

白桃のするりと剥くる朝かな

しやぶりては齒に当りたる桃の種

異常なしと医師に言はれて鶏頭花

校庭に球児の声や秋の夕

制服にアイロンをかけ秋の風

四枝のマスクを洗ふ秋の朝

黒松に熊蟬しばし鳴きにけり

朝焼の雲の端白く際立てり

日銀を囲む青景の戦ぎかな

暮れを待ち家族の皆で手花火す

七十七歳粥を啜りて秋を待つ

卵粥啜りてをりぬ古稀の処暑

我が部屋をきちんと並べ秋めけり

朝顔の今朝は十五個咲きにけり

寝ころんで流れ星見る親子かな

街路灯一つつ消ゆ秋の朝

あざみ

亜矢

敬子

夜の更けてしばらく仰ぐ盆の月
遠く立つ二百十日の波頭

昼の虫引き込み線に潮匂ふ

風吹いて土手に群れたる秋津かな

黒蒲萄水流し一つ洗ひけり

秋夕焼大温室の窓高く

夕星やおしろい匂ふ角曲がり

畑ごとに煙立ちたる秋の夕

高架橋の下を来る船秋彼岸

トンネルにまた入る列車憂殊沙華

暁子

令歎の花母の家へと向かひをり

縁側で母は花火を見てゐたる

小流れにサンダルながす跣の子

帰省の子満天の星見上げをり

畝ごとに家族総出で草を取る

山道を滝に向かふや蟬しぐれ

玄関のドアの開きて蚊火煙る

夕蟬や母の一日の話聞く

小流れを汲みては墓を洗ひけり

秋の雲百メートルの滝の上

ちどり

きちきちの踏み出す足に跳びにけり

秋蟬の骸を囲む下校の子

鰯雲電話架け合ふ姉の居て

四姉妹一行に行く墓詣

爽頼に景裏の白さありにけり

濡縁に足投げて見る盆の月

虫の声聞きつつ鎌を研いでをり

松手入松の高さに足場組み

野分晴鴉鳴きつつ飛びにけり

縁側に差し込んでゐる秋日かな

松本恵和

孫たちと索麵流す夕べかな

盆踊り孫の背丈の高きこと

バス停に白き花見て秋涼し

鰯雲どこまで続く一本道

朝露に鼻緒の濡れて父もどる

鴈鳴いて牛舎に朝の来たりけり

煮花果の熟れた一つを供へたる

土手沿ひに紫苑の群れて咲いてをり

川岸に二羽の鶺鴒飛んで来る

星月夜友からの手紙読み返す

美耶

大群の飛蝗が空を覆ひたる

野良に置く籠に赤子や鰯雲

ベランダの秋茄子一つ焼いて食ぶ

父母と兄弟鬼籍盆の月

秋の蝶山の中へと縫れ飛ぶ

高階のベランダの竿柿吊るす

釧路駅に啄木の像秋の旅

花咲線終点で降り秋刀魚食ぶ

高野山杉の実拾ひ持ち帰る

阿姐

楊貴妃のそを思はする紅蜀葵

盆の波寄せくる網を繕ひぬ

新涼のくぐつてゆける地下通路

崖下に爆心の街水引草

景の陰にひとつの紅き草の花

竈馬窓の明りの中に居り

拭き終へし廊下に来たる竈馬

水甕の蓋取れば跳ぶいとどかな

敷石に秋のしぐれの来りけり

大橋博子

くれなるの蓮の向うに港あり

どこからか来てテーブルに蜘蛛の居る

雷鳴の湖を渡つて来たりけり

虫鳴いて団ぢては開く戦記かな

新涼の坂を下りてパンを買ふ

処暑の家まつ毛の長き子の眠る

盆の月山に掛かりて上りけり

野を照らし畑を照らし盆の月

父逝きてのちの抽斗水の秋

ベランダに水槽ならべ田亀飼ふ

子供らは海水浴に連れ立ちて

白靴を履いて七十雑踏へ

誰も居ぬ朝の芝生に石叩

子を膝に秋の造作計画す

庭に生る最後のオクラ振れたる

秋旱パンクの自転車押してゆく

鳳仙花手術終へしと電話あり

かいつぶり潜る沖合フエリー行く

新涼や目覚まし時計鳴る未来

換気扇止めて秋めく風呂場かな

梨好きの子はパリパリと梨を食む

自転車は連れのトンボを変えながら

最後だけ屋根より高い花火かな

レーズンはラム酒に浸かる長き夜や

リフトより足は花野を遊びつつ

灰色の雨を弾いて女郎花

稲粟やあちこち道路陥没す

桑門わかこ

新庄憲彦

ふじ女

花カナン列車過ぎたる後に揺れ
きちきちの飛んで海へと続く道
残る蟬耳をくすぐるやうに鳴く
景隠れに葉ふくらんで月見豆
枝つきの栗の置かれし社かな
竹筒に芒をなめに挿してあり
ウォーキング誘ふ友あり夕月夜
城跡へつづく細道萩乱れ
鉄橋の下の高の景よく揺るる

松田裕子

朝だけの日のあたる庭花茗荷
鈴植の並ぶ格子戸夏の風
小流れに咽飼ひおく鮎の宿
休館に引き返す道油照
夕暮の降ろしてゐたる氷旗
流燈の寄つては離れ海へ出づ
校庭に夕日の差して秋桜
萩括る庭に簾を立て掛けて
雲様のまた伸びる腕秋の午後

森口良樹

住まはせてもらふ地球よ春の芝
なるほどと謂へるほどなる秋の月
儂は畑妻は習字と秋良き日
そよ風に竜胆揺るる村の道
根元から大木倒す野分かな
秋じやがを植へ終へて日の傾きぬ
カレー食ふ秋の日差の柔らかに
名月を一朵の雲の遮りぬ

英一

朝顔や空き地の隅に猫の墓

赤とんぼボンネットバスゆつくりと

秋灯や家路をたどる靴の音

仲秋やピアノ教室窓開き

青蜜柑日差しの中に鯉泳ぎ

漁釣や無口な父の笑ひをり

早朝の緑茶味はふ白露かな

図書館や金木犀の花見えて

栄吉

蟋蟀の風呂のどこかに鳴いてをり

テールの上のろのろと秋の蠅

薄雲に隠れてゐたる盆の月

秋の雲流れて嶺に影落とす

田中よりばつと立ちたる稻雀

鈍行の窓から見ゆる刈田かな

濯ぎ物に紛れてゐたる子蟪蛄

虫の声足踏み出せば鎮まりて

友岡崇山子

群を成し行つたり来たり秋苗

秋の蚊の叩かれ黒き点となる

ついて来て耳元で鳴く秋の蚊よ

六百年の巨木を倒す野分なり

音立てて流るる川や野分あと

草の露星のごとくに輝けり

岬へとつづく草原虫すだく

草原の鈴虫の声透き通る

穂高

朝蟬や窓の景色の变化はらざる

夏つばめ高架の下を飛び抜けて

釣人の離れて立てる鮎の川

夏雲の湧き続けたる日暮どき

葡萄棚白き袋の幾百も

大楠の声の重なるつくつくし

緑り返す母の杖音涼新た

虫の声しばらく聞いて眠りけり

秋の薔薇一つ二つと咲きにけり

秋桜細きうなぎの人に似て

鹿の声母と一緒に聴いた夜

秋の風古刹を猫の歩きをり

助手席に眺めてゐたる曼珠沙華

三日月の懸かれる空を帰りけり

秋桜ときどき人とすれ違ふ

コスモスや白蛇の赤き目の潤み

秋桜母に多くの笑ひ皺

飲む順に並べし薬秋の朝

線香の煙一筋彼岸花

連山の影を映して秋の水

秋茄子の今年はことによく生りて

井藤希

大畑恵

白神陽子

ガラス皿仕舞ひし秋の夕べかな

野の道を照らす秋の灯歩み寄る

秋の夜の向うの宮の笛の音

秋の夜の夫の書齋に時過ごす

幼子の薄を振つて帰りくる

白萩の雨に打たれて散りはじむ

紀英子

茂る景をくぐつて採りし茗荷の子

鈴植の緋色の合歡の花数ふ

タオル持ち裸の吾子を追ひかくる

風通る林の先に松虫草

雨音に耳澄ます夜二百十日

ビルの間の満月に歩を止めにけり

宮田保江

虫の宿声をひそめて夜咄す

銀やんま骨董店の上を飛ぶ

道端に彼岸花咲く追分宿

水引草道造詩集持ち歩く

遠藤さつき

ベランダにひとり酌みるる盆の月

旅の宿夫と探す秋の夕

黒葡萄しばらく甘き余韻あり

梨狩のバケツいっぱい剥きし皮

山崎桂子

板張りの冷たさ歩く蹠かな

石垣の間に百合の咲きにけり

秋の夜のハクビシン庭荒らすなり

かこ

玄関に荷物の届き虫の声

もろこしを茹でたる湯気に頬熱し

棕鳥の群が芝生に来てゐたり

上島康子

足元の地面浮くほど虫時雨

秋彼岸おはぎの重さ手に感ず

大道にマンホールある良夜かな

熊谷ゆり子

秋の空眼を射抜くほどの青

唐辛子空へと向いて赤緑

後の月雲を纏うて輝きぬ

民

秋高し自転車で来る三歳児

こほろぎに湯舟の中で耳澄ます

秋の蝶降りてきてすぐ見失ふ

ちかこ

流れゆく雲の切れ間の盆の月

明け方のひときは強き虫の声

秋晴の日はな一日本を読む

撫子

色褪せてをれど好みの日傘なり

虫の声寝つけぬままに聞いてをり

名を知らぬ梨の並びて産直市

幹

蛸が鈴の植木に来てをりぬ

かなかなを聞きつつ眼鏡拭いてをり

小半時路上で眺む盆の月

みさ子

道端の蟻螂の目に気づきたる

荒磯の野風呂に浸かり秋深し

荒波を聞きつつ眠る秋の夜

やす保